

談話機能から見る中国語における 文末助詞“吗”と“呢”の比較¹⁾

伊 藤 さとみ

1. はじめに

文末助詞は、それが表す内容が会話の行われる場と密接に関係し、話し手と聞き手の知識状態や話し手の意図によって使用条件が決まることが多い。そのため、談話機能の観点から文末助詞を分析することは有益であると思われる。本稿では、会話の共通基盤とそれに対する平叙文と疑問文の機能について定義した上で、現代中国語の文末助詞“吗”と“呢”を取り上げて両者の違いを論じる。具体的には、“吗”は当該命題を共通基盤に入れてもよいかどうかを問うのに対し、“呢”は共通基盤から当該命題と対比される命題を取り出すことを要求するという働きを持ち、発話行為のレベルにおいて一度に実行できない操作であるために、両者は共起しないことを説明する。

2. 問題提起

“吗”と“呢”は、文法研究の初期から、ともに疑問の意味を表すとみなされてきた(黎锦熙 1924, 王力 1943, 吕叔湘 1944)。そして、両者の違いは、前者が真偽疑問文(以後、“吗”を使った疑問文を“吗”疑問文と略す)を作り、後者は、“吗”疑問文以外の疑問文(疑問詞疑問文、正反疑問文、選択疑問文)に現れることにあるとも指摘されてきた。だが、この記述にはいくつかの問題がある。まず、“吗”については、真偽疑問文を作るのは事実だが、真偽疑問文にのみ使われる疑問標識があるのは、通言語的に普通ではない。例えば、日本語の疑問を表す助詞「か」、フィンランド語の疑問接辞 -ko/kö、英語に見られる助動詞と主語の倒置などの手段は、いずれも真偽疑問文にも疑問詞疑問文

にも使われる。加えて、中国語には“吗”以外にも正反疑問文、イントネーション疑問文など、複数の真偽疑問文の形式があり、それらの形式の間に明らかな使用文脈の違いがある。もう一つの問題は、“呢”について、疑問文に現れる“呢”と平叙文に現れる“呢”が存在することである。平叙文に現れる“呢”は、話題をマークする、確認や進行の aspekto を表すなど、疑問とは関係のない働きをする。“呢”を疑問助詞と分類するには、平叙文に現れる“呢”を全く違う形態素のように扱わなければならない。仮に、平叙文の“呢”は疑問と関係がないとしても、それならば、“吗”と共起してもおかしくはないはずだが、実際には“吗”と“呢”が同時に使われることはないという制限がある。つまり、この分析では、“吗”の特殊性も“呢”の統一的分析もできないのである。

本稿では、“吗”と“呢”は、純粋な疑問標識ではなく、会話の共通基盤に対する働きかけという談話機能を持つ接辞だと考える。このように考えることで、まず、“吗”疑問文が他の真偽疑問文と異なる性格を持つことを説明でき、また、“呢”に統一的な意味を与えることができる。さらに、“吗”と“呢”が共起しないのは、両者が共通基盤に対する異なる働きかけであるためと説明することもできる。以下、会話の共通基盤の概念と疑問文の意味論を紹介し、“吗”と“呢”のそれぞれの談話機能について述べる。

3. 会話の共通基盤と平叙文、疑問文の役割

3.1 平叙文の意味

会話の共通基盤 (Common Ground) とは、話し手がその会話において聞き手と共有していると信じている命題の集合である (Stalnaker 1978, Stalnaker 2002)。命題は、その命題が真であるような可能世界の集合と解釈されるので、会話の共通基盤は、可能世界の集合として表すことができる。このように定義される共通基盤に対し、平叙文がどのような働きをするのかを巡っては、古典的定義と動的定義の二種類がある。古典的定義は、Stalnaker (1978) で提案されたもので、平叙文は共通基盤を広げるとするものである。即ち、ある平叙文が発話され、それが聞き手に受け入れられると、その平叙文

の表す命題は、共通基盤に順次加えられる。これは、即ち、最初の共通基盤として命題数がゼロの状態を想定し、会話の進行に伴って共通基盤が豊かになっていくという考え方である。図1は、このモデルを図示したものである。最初の共通基盤を C_n で表すなら、“张三只吃素食（張三は精進料理しか食べない）”を発話すると、共通基盤はこの発話を含む C_{n+1} となる。このように、平叙文は、共通基盤を拡大するのである。

1) $C_n + \text{“张三只吃素食”} = C_{n+1}$

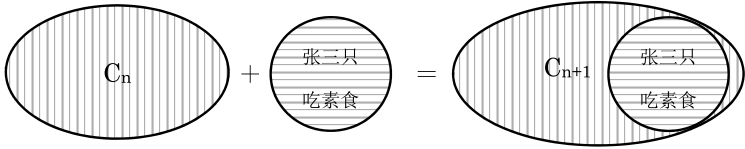


図1. 古典的平叙文モデル

だが、このモデルは、前提の問題を扱う場合に困難となることが後に指摘された。例えば、“I stop smoking”のような、“I smoked”を前提として持つような文を発話した場合、発話前にさかのぼって、前提を表す命題を共通基盤に追加する必要が生じる。こういった調整を無限に許すなら、最初の共通基盤は命題ゼロではなく、話し手の信念と矛盾しない限りにおいて無限の命題を含むことになる。そこで、Heim (1983) を始めとする動的意味論では、Stalnakerの定義を改め、平叙文は、共通基盤を狭める働きをすると述べた。最初の共通基盤は、話し手の信念と矛盾しないすべての命題の集合であり、平叙文を発話することは、その共通基盤を当該平叙文の意味と矛盾しない命題の集合に狭める働きをすることにある。例えば、“张三只吃素食（張三は精進料理しか食べない）”が会話の共通基盤Cで発話されたとすると、会話の共通基盤は、その命題と矛盾しない可能世界の集合に狭められる。図2は任意の文脈 C_n において“张三只吃素食”が発話されたとき、 C_n と“张三只吃素食”が真である可能世界の集合の交わりが新しい文脈 C_{n+1} になる様子を表している。²⁾

$$2) C_n + \text{“张三只吃素食”} = C_{n+1}$$

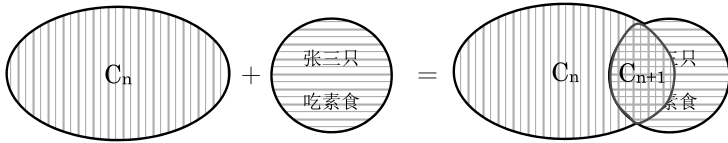


図2. 動的平叙文モデル

以上のように、肯定平叙文と会話の共通基盤の関係については、古典的モデルと動的モデルがある。現在の主流としては動的モデルであり、これは次に述べる疑問文の分析にも連続性を持つという利点がある一方で、初期の共通基盤を無限の命題の集合という、我々の直感を越えた設定をしなければならない。一方、古典的モデルは前提の問題を解決できないものの、話し手と聞き手の相互作用で形成される会話の共通基盤のイメージによく合致している。本稿では、“呢”のような文末助詞は、動的モデルではなく、古典的モデルに基づいた発話行為論のレベルで捉えることがふさわしいことを示す。

3.2 疑問文の意味

疑問文は、それが発話されても、会話の共通基盤を狭めたり、広げたりすることはない。Hamblin (1973) や Karttunen (1977) は、疑問文は、共通基盤の中にある不確定な要素を並べてどれが正しいかを問うものであるので、疑問文を発することは、共通基盤に存在するそれに対する可能な答えを提示することに等しいと述べた。この考え方を動的モデルに置き換えると、疑問文は共通基盤を分割する働きをすると見なすことができる (Groenendijk and Stokhof 1984)。例えば、「太郎は来ましたか。」という真偽疑問文は、{太郎は来た、太郎は来なかった} という二つの命題からなる集合であり、「誰が来ましたか。」という疑問詞疑問文は、{太郎が来た、花子が来た、次郎が来た、…} のように、疑問詞部分に個体を入れ替えて作られた命題の集合である。

形式的には、Mを個体の集合D (a, b, c, d) と述語Pからなるモデル、解釈関数を[[]], 命題をp、疑問標識を?、疑問詞をx、可能世界をw、変項への値割り当て関数gで表すと、真偽疑問文と疑問詞疑問文の意味は、以下のようになる。

$$3) \quad [[p?]]^{M,g} = \{ \lambda w [p(w) = 1], \lambda w [p(w) = 0] \}$$

$$4) \quad [[P(x)?]]^{M,g} = \{ \lambda w [P(g(x))(w) = 1] \}$$

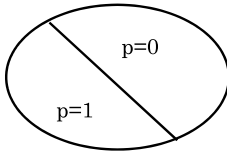


図3. 真偽疑問文の意味

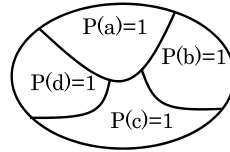


図4. 疑問詞疑問文の意味

真偽疑問文は(3)のように、肯定命題が真である可能世界の集合と、否定命題が真である可能世界の集合の二つの集合からなる集合として表される。それを図示したのが図3である。共通基盤をなす可能世界の集合を円で表し、それが肯定命題と否定命題で分割される様子を表している。一方、疑問詞疑問文は(4)のように、疑問詞部分を任意の個体で入れ替えて作られた各命題が真であるような可能世界の集合の集合であると定義される。これを図示したのが図4である。個体としてa,b,c,dの四つのみが含まれると仮定するなら、それぞれの個体が疑問詞部分に入れ替えられて作られた四つの命題P(a)、P(b)、P(c)、P(d)で共通基盤をなす可能世界の集合が分割されることを表している。

疑問文の意味はこのように定義することができるが、この定義がすべての疑問文を網羅できるかどうかについては異論がある。例えば、Krifka (2016) は、発話行為論的疑問文を別に定義することを提案している。また、中国語の真偽疑問文には、“吗”疑問文の他に正反疑問文もあり、場面に応じた使い分けがあるため、上記の疑問文の定義以外に新たな疑問文の定義が必要である。次節では、“吗”疑問文と正反疑問文の違いから、新しい疑問文の定義が必要であることを述べる。

4. “吗”の機能

“吗”という文末助詞は真偽疑問文を作る。だが、中国語には、真偽疑問文を作るものに正反疑問文もあり、両者は異なるふるまいを示すことがよく指摘されてきた。刘月华（1989）では、“吗”疑問文を三つに分類し、中立的な立場である場合（以後、傾きのない“吗”疑問文と呼ぶ）、話者がその質問に対して肯定または否定の答えを予測している場合（傾きのある“吗”疑問文）、平叙文と同じ機能を持つ場合（修辞学的疑問文）があることを指摘した。また、袁毓林（1993）、郭锐（2000）は、いずれも質問に対する答え方により、これらのタイプを区別することができるかと述べた。答え方の違いとは、動詞による答えをするか、応答助詞による答えをするかの違いであり、具体的には（5）-（7）に示したような違いで表される。（5）-（7）は、筆者が7人の中国語母語話者にアンケート方式でどちらの答え方を好むかを調査した結果であり、各例文の後の（n/7）のnの数字は、その答え方を自然とするものを1、不自然とするものを0.5、その答え方を不可とするものを0とし、足し合わせた数を表す。値が小さいほど容認されず、値が大きいほどより自然な答え方として容認されることを表している。

- 5) a. 你吃不吃素食? --- 对。(0/7)
 (精進料理を食べますか。 --- はい。)
- b. 你吃不吃素食? --- 吃。(7/7)
 (精進料理を食べますか。 --- 食べます。)
- 6) a. 你吃素食吗? --- 对。(3/7)
 (精進料理を食べますか。 --- はい。)
- b. 你吃素食吗? --- 吃。(7/7)
 (精進料理を食べますか。 --- 食べます。)
- 7) a. 你只吃素食吗? --- 对。(7/7)
 (菜食主義者ですか。 --- はい。)

b. 你只吃素食吗? ---- 吃。(1/7)

(菜食主義者ですか。 --- *食べます。)

正反疑問文の場合、応答助詞による答えは許されず(5a)、動詞での答えのみが容認される(5b)。この答え方は、2.2の疑問文の定義によく当てはまり、分割された可能世界のうち、肯定命題の部分が真であることを表していると考えられる。これに対し、“吗”疑問文では、動詞による答えが好まれるものの(6b)、応答助詞でも容認する話者が増える(6a)。さらに、“只(だけ)”という副詞を含む“吗”疑問文では、応答助詞による答えが容認され(7a)、動詞による答えは容認されにくい(7b)。このように、答え方の違いから“吗”疑問文は二種類に分けられる。前者は刘月华(1989)の傾きのない“吗”疑問文、後者は傾きのある“吗”疑問文にあたる。

では、この二種類の“吗”疑問文の意味はどう違うのであろうか。まず、正反疑問文と同じ答え方の“吗”疑問文については、2.2で示した、共通基盤の分割という疑問文の定義を適用できるだろう。だが、応答助詞による答え方の“吗”疑問文については、新しい定義が必要になる。

そこで、Ito(2017)では、正反疑問文と異なる“吗”疑問文は、“只(だけ)”という副詞(焦点敏感演算子)を含み得ることから、当該命題を共通基盤に追加してよいかを問う働きをすると述べた。“只(だけ)”のような焦点敏感演算子の研究に関しては、初期のものにRooth(1985)があり、焦点を含む文の解釈には、当該命題だけでなく、当該命題から焦点部分のみを入れ替えて作られる代替集合が必要であると述べ、文の派生の過程でこの代替集合を作り出す演算子を提案している。比較的新しいBeck(2006)などでも、通常値、即ち、命題そのものの意味と、焦点値、即ち、代替集合の両方が焦点の解釈に必要であることが述べられている。具体的に、どのように代替集合が必要であるかを(8a)の例で説明すると、私が食べるものの候補として考え得る集合のうち、“素食”が唯一の選択肢であることを断言するのが“只(だけ)”を含む文の解釈となる。(8b)では、“我吃x”が代替集合を表し、そのxに入り得るすべてのものの中で、“素食”が唯一の選択肢であることを“x=素食”が表している。

8) a. 我只吃素食。

(私は野菜しか食べません。)

b. $\forall x$ [我吃 $x \rightarrow x = \text{素食}$]

従って、焦点を含む文の解釈のためには、“我吃 x ” という命題により、可能世界は分割されていなければいけない。一方、正反疑問文も可能世界の分割により作られている。そのため、焦点を含む文を正反疑問文にするには、焦点解釈のために分割した可能世界を、再度分割しなければならない。だが、そのような操作は人間の知能には不可能なようである。そのことは、次のように、正反疑問文に“只(だけ)”という副詞は現れることができないことから分かる。

9) *你只吃不吃素食?

(あなたは野菜しか食べませんか。)

これに対し、“吗”疑問文には、(7a) のように“只(だけ)”が現れることができる。Ito (2017) では、これは“吗”疑問文が従来の定義による真偽疑問文とは異なるということを示唆していると考え、“吗”疑問文には、2.2で紹介した意味ではなく、以下のような、当該命題を共通基盤に追加してよいかを問うという意味を提案した。

10) a. 你只吃素食吗?

b. $\exists p$ [$p = \lambda w$: 你只吃素食 (w) \wedge [$p \subseteq CG_w \vee p \not\subseteq CG_w$]]

ただし、Ito (2017) の定義は、存在量化される p についての説明が曖昧であった。この部分は、“吗”疑問文を発話する際に話し手が当該命題に対して何らかの予想をしていること、即ち、疑問文の傾き (bias) を意味している。これは、当該命題が可能世界 w における話し手 s の信念 (Bel_w^s) の中に存在することにほかならない。従って、“吗”の意味は以下ようになる。

11) a. “吗”は、話者の心にある当該命題を共通基盤に追加してもよいかを聞く。

b. [[吗] = λp [$\exists p \in Bel_w^s \wedge$ [$p \subseteq CG_w \vee p \not\subseteq CG_w$]]]

$p \in D_{\langle s,t \rangle}$ 、 $w \in W$ 、 $Bel_w^s = w$ における話し手 s の信念の集合、

$CG_w = w$ における共通基盤

この“吗”の定義を「傾きのある“吗”疑問文の定義」と呼ぶ。この定義は、動的意思論の延長にあった疑問文の定義、即ち可能世界の分割という考え方を採用していない。そして、共通基盤に加えてもよいかどうかを問うという点で、古典的意思論の平叙文の定義の延長にある。つまり、初期状態がゼロの共通基盤に対し、命題を加えるかどうかの決定権を聞き手に預けているのである。

5. “呢”の機能

5.1 “呢”の文法機能上の位置づけ

語気助詞“呢”の機能については、伊藤（2018）で詳しく論じているため、ここではその主張の概略を述べる。伊藤（2018）では、“呢”が言外に他の個体や命題との対比の意味を持つことに注目し、その意味を以下のように定義した。

12) a. “呢”の基本的な機能は、対比である。

$$b. \llbracket \text{呢} \rrbracket = \lambda X \exists q \in CG_w [f(X) = p \wedge \{w:p(w) = 1\} \cap \{w:q(w) = 1\} = \emptyset]$$

これによると、“呢”は任意の要素Xを項にとり、そのXから一つの命題を取り出し ($f(X) = p$)、その命題が共通基盤にある任意の命題qと両立しないことを表す。Xが疑問文の場合は、疑問文の表す命題の集合から一つの命題pを選び、Xが平叙文の場合は、 $X = p$ となって、当該命題と対比される命題が共通基盤にあることを表す。以下、(13)は正反疑問文、(14)は疑問詞疑問文、(15)は平叙文の例である。いずれも、“呢”は、それが付与された表現を取る関数であるが、対比される命題は、(13)や(14)のように疑問文の場合は、疑問文で与えられる命題の集合から再度選ばれるが、(15)のように平叙文の場合は、共通基盤にある任意の命題となる。

13) a. 你去不去呢？

(どこに行くの。)

$$b. \{w: \llbracket \text{你去} \rrbracket(w) = 1\} \cap \{w: \llbracket \text{你不去} \rrbracket(w) = 1\} = \emptyset$$

14) a. 你吃什么呢？

(何を食べるの。)

b. $\{w: \llbracket \text{你吃肉} \rrbracket (w) = 1\} \cap \{w: \llbracket \text{你吃鱼} \rrbracket (w) = 1\} \cap \dots \cap \{w: \llbracket \text{你吃水果} \rrbracket (w) = 1\} = \emptyset$

15) a. 我在做作业呢。

(宿題をしているのよ。)

b. $\llbracket \text{我在做作业呢} \rrbracket = \exists q \in CG_w [\{w: \llbracket \text{我在做作业} \rrbracket (w) = 1\} \cap \{w: \llbracket q \rrbracket (w) = 1\}] = \emptyset$

伊藤 (2018) では、命題の対比という機能のみを“呢”に与えることにより、“呢”の使用が話者や場面によって大きく異なる現象が説明できることを示した。本稿では、さらに、“呢”が決して使われない状況の説明から、この分析の妥当性を見る。対比の過程は、ある程度の思考時間を要求するため、特定の情報を急いで尋ねるときには使われないと思われるが、以下のドラマからの抜粋による調査はこのことを支持している。(16) は、テレビドラマ《田教授の二十八个保姆》の一節を一部改変して7人の中国語母語話者に調査したもので、例文の後にある「原文: -」は、原文で語気助詞が使用されない場合は×、使用された場合はその語気助詞を示している。「調査: n/7」のnの数字は、“呢”を使用できると判断した話者の数である。

16) [普段は料理を担当する祖母は足を怪我してベッドで寝ている。孫の田思文が祖母にやり方を聞きながら料理をしている。]

思文: 奶奶, 我这辣椒焯好以后下面干嘛呀? (原文: 呀, 調査: 3/7)
(おばあちゃん、この唐辛子を炒めたら次は何をするの。)

奶奶: 把焯好的那个肉片啊, 跟这个辣椒合起来, 炒一下。

(炒めた肉をね、その唐辛子と合わせて、少し炒めて。)

思文: 肉片喔。

(肉ね。)

[思文は肉を鍋に入れる。]

思文: 奶奶, 我肉片放进去啦。下面干什么呀? (原文: 呀, 調査: 3/7)

(おばあちゃん、肉を入れたよ。次は何をするの。)

奶奶：放点水，放点酱油，再放点糖。

(水と、醤油と、それから砂糖を少し入れて。)

思文：什么？放什么？ (原文：×、調査：0/7)

(なんだって、何を入れるの。)

奶奶：放水。

(水を入れるの。)

思文：放水啊。

(水を入れるのね。)

奶奶：酱油。

(醤油。)

思文：喔，酱油。那么多个瓶，哪个是酱油啊哪个是酱油？ (原文：啊、
調査：0/7)

(ああ、醤油ね。こんなにたくさん瓶があるけど、どれが醤油？
どれが醤油？)

奶奶：就是那个，那个啤酒瓶里。

(その、そのビール瓶の中だよ。)

思文：啤酒瓶啤酒瓶！

(ビール瓶、ビール瓶！)

奶奶：再闷一会，再放点味精，就可以盛出来了。

(もう少し蒸らして、調味料を入れたら、盛り付けていいよ。)

思文：味精，味精。好嘞，我知道了啊。

(調味料，調味料，よし、わかったぞ。)

以上からわかるように、漠然と“下面干什么？(次は何をするの)”と問うときには、“呢”を容認する話者もいるが、“放什么？(何を入れるって)”，“哪个是酱油？(どれが醤油なの)”の場合のように、特定の情報を急いで尋ねているときには、“呢”は使われない。特に、“哪个是酱油？(どれが醤油なの)”では、“哪个(どれ)”という疑問詞に、既に与えられた集合の中から正しいものを選ぶ

という意味があるので、他の可能な答えとの対比が予想されるにも関わらず、この文脈においては、“呢”の使用は不適切である。それは、「こちらの瓶かな、あっちの瓶かな」と逡巡する時間がない状況だからであり、“呢”の表す対比の意味は、森山・木村（1993）が“呢”の機能として述べた「思い惑い・疑念」に通じるとも言える。

この“呢”の定義は、共通基盤に操作するものではない。疑問の意味は、疑問を表す表現により得られ、“呢”は疑問の意味に対比の意味を追加するのみである。また、平叙文の場合は、平叙文の機能として共通基盤を狭める働きをし、付加された“呢”は聞き手に当該命題と矛盾する命題があることを察知させる働きのみをする。このように、“呢”は動的意味論で定義される平叙文や疑問文の意味に被さるような形で働いている。本稿では、この“呢”の働きは、話し手から聞き手への働きかけと言う、発話行為のレベルにおける働きかけであり、古典的定義による共通基盤の考え方で分析できると考える。

6. “吗”と“呢”の共起制限

3節と4節では、それぞれ“吗”と“呢”の定義について述べた。この節では、この定義に基づき、両者が同時に使えないという現象に説明を試みる。4節で述べたように、“吗”には多義性があるが、まず、傾きのある“吗”疑問文の定義と“呢”の意味の相容れないことを示し、次に傾きのない場合にも“呢”を使えない理由について説明する。

まず、傾きのある“吗”疑問文に“呢”は現れることができない。

17) a. *你只吃素食吗呢？

b. *你只吃素食呢吗？

4節で述べたように傾きのある“吗”疑問文は、当該命題が話し手の信念の中にあり、それを共通基盤に入れてもよいかどうかを聞き手に問うものである。一方、“呢”は聞き手に対して、当該命題と対立する命題を共通基盤の中に見つけるよう、要求する働きをする。従って、前者と後者では同じ共通基盤に対して別の操作を一度に行うよう、聞き手に要求しているわけである。複数

の操作を一度に聞き手に要求できず、従って、“吗”と“呢”が共起しないと説明することができる。

ただし、進行のアスペクトの“呢”に“吗”が後続する形であれば、観察されることもある。李晟宇（2005）では、以下のような“呢”と“吗”の連用が報告されている。

18) 日本兵不是在天津附近打呢吗？

（日本兵は天津付近で戦っているのではないか。）

これは、“不是……吗？”という疑問文の中に、“在……呢”という進行アスペクトの表現を伴う節が埋め込まれた形式である。このように進行アスペクトを表す“呢”に関しては、埋め込み文で使われることを許す。これは、進行アスペクトの持つ性質と関連がある。進行アスペクトは、現実世界について当該命題の真偽を判断するのではなく、現実から派生した未来の世界における真偽も考慮に入れなければならないことが知られている（Dowty 1978）。例えば、(19b) に示したように、“I’m building a house”が真になるためには、現在の世界 w_0 と時点 t_0 から接近可能なある世界 w の未来のある時点 t において、“I build a house”が真であることが必要である。逆に、発話の時点 t_0 では、“I build a house”は真ではない。

19) a. I’m building a house.

b. $\exists t, w [t_0 < t \wedge w \text{ is accessible from } w_0 \wedge I \text{ build a house } (t, w) = 1]$

この議論は、完成動詞の進行形に関して組み立てられているが、活動動詞に関しても、同じ枠組みが適用できるとしよう。すると、対比される命題として、共通基盤の任意の命題を選ぶ代わりに、未来の世界における命題を対比の対象に選ぶことができる。つまり、“日本兵在天津附近打（日本兵は天津付近で戦っている）”という現在に関する命題は、近い未来における“日本兵在天津附近打（日本兵は天津付近で戦っている）”を含んでいるのである。そのため、進行アスペクトの“呢”に関しては、共通基盤を探して対比される命題を探す必要がない。これが、進行アスペクトを表す場合には、埋め込み文に“呢”が現れる

ことができる理由だと思われる。そして、埋め込み文の中に現れたときには、主節に“吗”が現れても互いに矛盾しないわけである。

次に、傾きのない“吗”疑問文について論じる。4節に述べたように、“吗”疑問文には多義性があり、傾きのない“吗”疑問文は正反疑問文と同等の働きをする。そこで、正反疑問文に“呢”が使える以上、傾きのない“吗”疑問文にも使えるはずである。だが、実際には“吗”疑問文はいかなる時にも“呢”を伴うことができない。

- 20) a. 你去不去呢?
 (あなたは行くのですか.)
 b. *你去吗呢?
 (あなたは行くのですか.)

これは、“吗”疑問文の基本的意味は、傾きのある意味であり、正反疑問文と同じ意味の“吗”疑問文は、以下のような変換を経て得られる意味であるからと思われる。

- 21) 傾きのある[[吗]] ⇒ 傾きのない[[吗]]

$$\lambda p [\exists p \in \text{Bel}_w^* \wedge [p \subseteq \text{CG}_w \vee p \not\subseteq \text{CG}_w]] \Rightarrow \lambda p [p \subseteq \text{CG}_w \vee p \not\subseteq \text{CG}_w]$$

つまり、“吗”疑問文の基本的意味は、ある命題が話し手の信念の中にあり、それを共通基盤へ追加してよいかどうかを問うものであるが、当該命題が話し手の信念の中にあるという部分が背景化されることで、正反疑問文のようにふるまうのである。但し、共通基盤への言及がある点は変わらないため、“呢”が依然として使われないのだと思われる。

7. まとめ

以上、平叙文と疑問文の会話の共通基盤に対する作用を俯瞰し、平叙文の機能には古典的定義と動的定義の二種類があること、疑問文の機能については、動的定義の延長上にある、共通基盤の分割という考え方が主流だが、中国語の“吗”疑問文と正反疑問文の違いに基づくと、古典的定義の延長として、共通基盤に含まれる命題ゼロから発話行為を起こすモデルも必要であることが明ら

かになった。中国語の文末助詞“吗”と“呢”は、どちらも動的意味論的な定義による疑問文を作るのではなく、発話行為のレベルでの聞き手に対する働きかけを表す。具体的には、中国語における文末助詞“吗”が共通基盤へ当該命題を追加してもよいかを問う働きをするのに対し、“呢”が共通基盤に当該命題と対比される命題が存在することを示す働きをするのである。さらに、両者が同時に用いられないのは、それぞれが聞き手に対し、会話の共通基盤に対して異なる操作をするよう要求しているからである。これは、発話行為のレベルでは、聞き手に要求できる操作は一文につき一度という原則があることを示唆している。

注

- 1) 本研究の遂行に当たっては、多くの方の協力をいただきました。お茶の水女子大学中国文学会第回大会(2017年4月)、シンポジウム(2017年9月)で貴重な意見をくださった方々、及び、例文の調査に協力くださったお茶の水女子大学大学院の留学生の方々に、厚くお礼申し上げます。なお、この研究は、東京外国語大学AA研共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」研究代表者：Eric McCreedy (2015年度-2017年度) 及び、JSPS科研費16K02620の助成を受けたものです。
- 2) Heim(1983)では、否定平叙文、条件節の文脈変化可能性も述べられているが、本稿では割愛する。

<英語参考文献>

- Beck, Sigrid. 2006. Intervention effects follow from focus interpretation. *Natural Language Semantics* 14 (1): 1-56.
- Dowty, R. D. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. D. Reidel Publishing Company.
- Groenendijk, Jeroen A.G., and M.J.B. Stokhof. 1984. *On the semantics of questions and the pragmatics of answers*. Ph. D. Thesis, University of

Amsterdam.

- Hamblin, Charles L. 1973. Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10 (1): 41-53.
- Heim, Irene. 1983. On the projection problem for presuppositions. *West Coast Conference on Formal Linguistics* 2: 114-25.
- Ito, Satomi. 2017. Intervention effects in answerhood. 『人文科学研究』13: 13-25.
- Karttunen, Lauri. 1977. Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1 (1): 3-44.
- Krifka, Manfred. 2016. Associations and questions in commitment space semantics. Paper presented at Theoretical Linguistics at Keio.
- Rooth, Mats. 1985. *Association with focus*. Ph. D. Thesis, University of Massachusetts, Amherst.
- Stalnaker, Robert C. 1978. Assertion. In Cole, Peter (ed.) *Pragmatics*, 315-332. Academic Press.
- Stalnaker, Robert. 2002. Common ground. *Linguistics and Philosophy* 25 (5-6): 701-21.

< 中国語参考文献 >

- 郭锐. 2000. 〈“吗”问句的确信度和回答方式〉《世界汉语教学》(02): 13-24.
- 李晟宇. (2005). 疑问语气词的连用. 语文学刊, (17): 1-3.
- 黎锦熙. 1924. 《新著国语法》北京: 商务印书馆.
- 刘月华. 1989. 〈用“吗”的是非问句和正反问句用法比较〉《汉语语法论集》: 199-222.
(原载《句型与动词》北京: 语文出版社 1987.4)
- 吕叔湘. 1944. 《中国语法要略》(中卷). 上海: 商务印书馆.
- 王力. 1943. 《中国现代语法》. 北京: 商务印书馆.
- 袁毓林. 1993. 〈正反问句及相关的类型学参项〉《中国语文》2: 103-112.

<日本語参考文献>

- 伊藤さとみ. 2018. 「疑問文中の語気助詞“呢”の機能：疑問演算子か対比話題メーカーかをめぐって」『大東文化大学学術シンポジウム論集』印刷中.
- 木村英樹・森山卓郎. 1992. 「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』235-276. 東京：くろしお出版.